

昔、あてなる男有りけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よぼひけり。されど若ければ、文もをさをさしからず、ことばもいひ知らず、いはむや歌はよまざりければ、このあるじ

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べる。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。タイトルも段番号も元々は書かれてないので、教科書によって違いがある。

なる人、案を書きて書かせてやりけり。めでまどひにけり。さて、おとこのよめる。

2 主語の把握は文の流れからも想像できる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひぢて逢ふよしもなし<sup>3</sup>

3 わかりやすい掛詞がありますね。

返し、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひづらめ涙河身さへなると聞かばたのまむ<sup>4</sup>

4 業平の代筆による返歌。また、平安常識として、求愛の歌には

といへりければ、男いといたうめでて、今まで巻きて、文箱にいれて

簡単にには靡かない返歌を贈ることが多い

ありとなむいふなる。<sup>5</sup>

5 ここ笑う所。

おとこ、ふみをこせたり。得てのちの事なりけり。「雨のふりぬべきになむ見わづらひ侍る。身さいはひあらば、この雨はふらじ」といへりければ、例の男、女にかはりてよみてやらす。

かずかずに思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

とよみてやれりければ、蓑も傘もとりあへで、しどろに濡れてまどひ

来にけり。